

## 難波西鶴と

## 海の道

【91】

森田 雅也

西鶴のころ、難波と九州を結ぶ瀬戸内海航路は大切な流通ルートであるとともに、情報交換の大切なルートでした。「懐硯」「貞享3(1686)年刊」巻五の「佛の似せ男」は、奇妙な話です。

日向の国(宮崎)に櫻森与太夫という賢く裕福な百姓が妻と幸福に住んでいました。ある日、いつものように畑仕事に出ますが、

なぜかそのまま行方不明になってしまいます。残された美しい妻は悲しみと戸惑いの中、3歳になる子を立って、気丈に家を守ります。

近くに渡船伝介という百姓が住んでいましたが、飢饉などで貧乏をし、土地も家族も捨てて、袖乞いとなって、放浪生活をしていました。安芸(広島)の宮島でいると、自分と同じ境遇の男に目を見張ります。その顔は与太夫に間違いありませんでした。

声をかけると、「私は与太夫ではない。鹿児島の大隅が生国の小平太だ」と言い張ります。

伝介はそれでも与太夫と首の傷まで同じところにある彼をあきらめられず、彼に与太夫のすべてを語る

と、小平太は美人妻自当に欲心が出て、日向へと向かいます。まずは、「天狗にさらわれた者」として、果けたふりをして村の近くに住みますが、この噂を与太夫の女房も耳にします。与太夫の女房は会うや嘘し涙を流し、彼に間違いなしとして家に迎え、近所や遠い親せきまで呼んで祝いの宴を催します。2年目の春には2人の間に子どもま

## 「佛の似せ男」

できて、小平太はこの家で落ち着いてしまいます。そんな時、村は干ばつに襲われます。11年前の干ばつでは、与太夫が神社に雨乞いの祈願文を書き、雨を降らしたことがあったので、村中が再度の祈願文を願いますが、小平太は字が書けず、不審がられます。ところが女房は、字が書けないのは天狗のせいとして、小平太を守り、夫婦生活を続けます。

奇妙な話ですが、この素材も広島と宮崎を結ぶ情報交換ルートによるのでしょうね。

(関西学院大文学部文学言語学科教授)

# 広島と宮崎を結ぶ妙な話